

大和国北西部の牧と馬

鷲森 浩幸

はじめに

大和国の北西部の山麓地帯、生駒あたりから平群・馬見丘陵までの地域は馬や牧と結びつきが強い。平群氏は平群を本拠とする有力豪族である¹。平群氏と馬は密接な連関を有したことがしばしば強調されてきた。もちろん、馬や牧との連関は大和国のこの地域にのみみられるものでなく、すでに大和川沿いの額田や吉野周辺について考察を加えたことがあり²、また、東方の山麓地域も同様であったと思われる。さらに、この地域から山地を越えた河内国の東端地域も馬や牧とのつながりが強く、大きく大和国北西部と一体的にとらえることが可能であろう。

本稿は平群地域における馬や牧を考察するためのいくつかの論点を提示するものであるが、十分な考察を行うことができず、覚書として資料の提示を中心とすることを断っておきたい。

なお、史料引用にあたり、漢文は書き下し、『万葉集』も万葉がな原文ではなく、書き下し文とした。『日本書紀』『万葉集』ともに基本的に『日本古典文学大系』によった。

1. 平群氏と馬

平群氏はいわゆる武内宿禰後裔氏族でのひとつで、『古事記』によると、武内宿禰の子平群都久宿禰の後裔が平群臣・佐和良臣・馬御檝連である。『新撰姓氏録』によると、平群氏と同族は七氏である(表1)。武内宿禰の男「都久宿禰」は「都久足尼」「木兎宿禰」とも表記されるが、すべて同じである。このなかで、馬御檝連(『新撰姓氏録』では馬工連)氏に留意すべきである。御檝は馬などをつなぎとめる「くい」のことで、それらの工作にあたることから馬工の名称が生まれたのであろう。

いわゆる二条大路木簡に次のようなものがある(『平城宮発掘調査出土木簡概報』31 23ページ)。

- □□□□〔大倭国平カ〕群郡中郷牧野里
- []□麻呂口日□〔下カ〕部稻女封戸白米五斗

(171)・(22)・2 059

平群郡中(『和名抄』は那珂)郷は大和川の北方の三郷町勢野付近であり、そこに牧野の地名があったことがわかる。なお、馬御檝連の祖神を祀ると伝承されるのが御櫛神社(現奈良県平群町椹原)である。これは『延喜式』神名上にも記載のある神社である。馬御檝連の存

在や地名牧野の遺存は平群氏と馬のつながりをものがたるが、従来、多く論じられてきた点にはほかにある。

『紀氏家牒』逸文(該当部分のみ掲出)³

家牒に曰わく 六男平群木兔宿祢 応神・仁徳・履中三代の天皇に歴仕し国政を執る。凡そ寿殆んど一百五十余歳なり。初め木兔宿祢 仁徳天皇と同日に生まる。神功皇后政六十年然後、大倭国平群県平群里に家し故に平群木兔宿祢と称す。是れ平群朝臣・馬工連等の祖なり。

家牒に曰わく (略)又云わく 額田早良宿祢の男額田駒宿祢 平群県に馬牧在りて駿駒を扨びて養い天皇に献ず。勅して姓を馬工連と賜い飼うを掌どらしむ。故に其の駒を養うの処を号けて生駒と曰う(又云わく 額田駒宿祢男 []馬工御織連)。

紀氏家牒に曰わく 平群真鳥大臣の弟額田早良宿祢 平群県額田里に家す。父氏を尋がず(「母氏」脱か)姓額田首を負う。

内容を簡単に要約すると次のようになる。

- (1).平群木兔宿祢は大倭国平群県平群里に居住したので、その名がある。この人物は平群朝臣・馬工連らの祖である
- (2).額田早良宿祢の男額田駒宿祢が平群県の牧で駿駒を飼育した。天皇に献上し馬工連と賜姓され、馬の飼育をつかさどった。駒を飼育した所を生駒という。
- (3).平群真鳥大臣の弟額田早良宿祢が平群県額田里に居住した。母の姓をつぎ額田首となった。

(1)の後半が平群木兔宿祢を平群朝臣・馬工連の祖とする『新撰姓氏録』の記事などに基づくことはまちがいない。木兔宿祢が平群県平群里に居住したととする点は独自の記述である。(2)は生駒の地名起源説話で、額田を氏名とする早良・駒が平群県の馬牧で馬を飼育したとする。(3)が額田早良の出自を説明する記述であるが、『新撰姓氏録』河内国皇別の額田首の記載(平群木兔宿祢の後なり。父氏を尋がず、母氏額田首を負う)と共通することは明白である。この史料を過度に信頼することはできないと思われる。ただ、平群氏が、生駒山周辺で馬の生産を行い、それが生駒の地名の起源となったことは認められると思われる。額田について別に論じたが、大和の額田は平群氏と明確な関係は認められず、倭馬飼が出仕した王家の中核的な牧であったと考えられる。

もうひとつの論点が『日本書紀』武烈即位前紀の平群真鳥・鮪の物語である⁴。関わるのは太子小泊瀬稚鷦鷯(武烈天皇)が影媛を求めて海柘榴市の歌垣に行こうとし、大臣平群真鳥に官馬を求めたが、真鳥は応じなかったという場面である。

大臣平群真鳥臣 専国政を擅にして日本に王とあらんと欲う。陽りて太子の為に宮を営るまねす。了りて即ち自ら居む。觸事に驕り慢りて 都て臣節無し。ここに 太子物部鹿火大連の女影媛を聘えんと思おして 媒人を遣して影媛が宅に向わしめて会わんことを期す。影媛曾に真鳥大臣の男鮪に奸されぬ(鮪 これをしびという)。太子の期りたまう所に違わんことを恐りて 報して曰さく 妾望わくは 海柘榴市の巷に待ち奉らんともうす。是に由りて 太子期りし処に往でまさんとす。近く侍える舎人を遣わして 平群大臣の宅に就わしめて 太子の命を奉げて官馬を求索わしむ。大臣戯言に陽り進りて曰わく

官馬は誰が為に飼養へや。命の随にといいて 久に進らず。太子懐恨いて 忍びて顔に発したまわず。

太子が舎人を送り真鳥の宅で官馬を求めさせたところ、真鳥はたわむれて、「官馬は誰のために飼養するのでしょうか、命のままにします」と答えたものの、久しく進上せず、太子は恨をもったが、顔にあらわさず歌垣にむかったとある。

この記述から平群氏が大王家の馬の管理を行ったとする見解が有力である。しかし、この部分は基本的に真鳥の専横を強調するための誇張であると思われる。なぜならば、大王家の馬の飼育や管理を担当したのはまず職業部としての馬飼(倭馬飼・河内馬飼)であったはずだからである。大王の地位に関わる大王家の財産を職業部が管理することは部民制の基本的な原則である。

そして、真鳥や鮪の地位や滅亡が歴史的事実であるかいなかも議論のあるところである。平群氏が大王家と密接な婚姻関係を結んだ痕跡がないこと、同族が多くはないこと、部曲である平群部も多くはないことなどが指摘されており、平群谷の古墳も五世紀後半に築造が始まり、六世紀後半に画期を迎えたと考えられるとの指摘もある(辰巳和弘)。ここでこの問題に立ち入ることはしないが、『古事記』の平群臣の祖志毘(鮪)臣の物語に父真鳥は登場せず、歌垣の場で即位前の顕宗天皇(袁祁命)と菟田首の女大魚をめぐって争い、志毘を殺害したとするにすぎない。

以上のように、平群氏が大王家の馬を管理したことや大和の額田での馬(額田馬)の飼育に関与したことは否定されるべきである。しかし、平群氏の同族に馬御楫(馬工)連がいたことは事実で、この点が平群氏と馬の関係を示す根拠である。これこそが平群地域における牧の存在を考える前提である。

2. 檜本神社・靈感寺・双墓

『延喜式』神名上に大和国平群郡の神社として「雲甘寺坐檜本神社」がある。この神社は『日本三代実録』にも登場する。まず、『国史大系』に従って記すと次のようである。

(1). 貞観 3(861)年 10 月 22 日条 雲感寺無位檜本神に従五位下を授く。

(2). 貞観 8 年 5 月 24 日条 大和国平群郡雲甘寺従五位下檜本神を以て官社に列す。

(1)に「雲、原作靈、抛下文貞観八年五月紀及神名式改、而此上恐脱大和国三字」と校訂注が付けられており、『国史大系』は原本の「靈」を(2)の記事や『延喜式』の記載により「雲」に改めたことがわかる。雲感寺や雲甘寺の名はいまひとつ難解で、原本どおりの「靈感寺」が理解しやすい。「甘」を「感」に通じるものと考え、「雲」を「靈」の誤写とみて、寺名は「靈感(甘)寺」であった可能性は大きい。

檜本神社に関する近世以来の地誌の記載を掲出する。

『大和名所図会』

梨本祠 梨本村にあり 今は野馬田明神と称す 神名帳に出づ

『大和志』

雲甘寺坐檜本神社 三代実録 靈感寺に作る 貞観三年十月従五位下を授く 八年五月官社に列す ○梨本已郡尾邑に在り 今 野馬田明神と称す

『大日本地名辞書』

檜本神社 三代実録云 貞観三年 平群郡雲甘寺檜本神叙位 延喜式云 雲甘寺坐檜本神社 大和志云 雲甘寺坐檜本神は梨本村野馬田明神なり 県名勝志云 梨本の字宮脇に在り

『大和志料』

雲甘寺坐檜本神社 延喜式に見ゆ 平群村大字梨本の村社たり 祭神詳ならず(注:特選神名帳には不詳 明細帳には菊理比売命とあり) 但し雲甘寺 三代実録に靈感寺に作る 已廃し址詳ならず

この神社は現在でも平群町梨本にある。伝承などによると、江戸時代期には白山権現で、元は、東方500m付近の丘の上にあった雲甘寺の鎮守社であったが、明治4(1871)年に寺が廃され、同24年頃に現在地に遷座されたい。また、祭神は不明とも、菊理比売命ともされる。

靈感寺単独でも『類聚国史』(182 施入物)天長5(828)年12月15日条にみえる。この時、備前国稲1000束が大和国靈感寺に充てられた。この靈感寺は今問題としている靈感寺と同じとみてよからう。寺院としての創建はこれ以前にさかのぼることが確認できる。

靈感寺の所在地(現在の檜本神社のから東へ500mの地点)に近接して、長屋王・吉備内親王のものとされる墓が存在することは注目される。長屋王墓の下に削平された6世紀前半の前方後円墳(梨本南2号墳)が存在し、吉備内親王墓は横穴式石室をもつ古墳と考えられるが、2つの墓ともに被葬者は特定されていない。

さしあたり2つの墓を長屋王・吉備内親王墓と切り離して考えるのが穏当であろうが、墓の存在自体は古代にさかのぼらせて考えることができるのではなかろうか。寺院名としての「靈感」は御霊信仰との関わりを想起させ、墓に近接して怨霊を鎮めるための寺院や神社が創建されることは十分に考えられるからである。つまり、この地に墓・寺院・神社のセットが存在し、御霊にまつわる祭祀の場となっていたのではなかろうか。次に述べるように、檜本神社が叙位され、官社とされたのはちょうど御霊信仰が急速に広がっていった時期であった。

まず、注目すべきは貞観5年5月の神泉苑での御霊会である(『日本三代実録』同年月20日条)。周知のごとく、この時、御霊とされたのは崇道天皇(早良親王)・伊予親王・藤原夫人(吉子)・観察使(藤原仲成)・橘逸勢・文室宮田麻呂の6人の霊であった。当時、御霊として強く意識されたのはこの6人であったことはまちがいない。

貞観期前半、夏の霖雨は毎年のように起き、干害もめだつが、貞観5年の咳逆病の大流行や翌6年の富士山の大噴火、阿蘇山の神霊池の異変など、大きな異変も相次いだ。神泉苑の御霊会は咳逆病の流行によるものである。

ほかにも御霊信仰とつながるとおもわれる事項も散見される。まず、貞観2年から4年にかけて真如(高丘親王 平城天皇の子)や在原善淵(高丘親王の子)が主導して平城天皇に関わる水田の施入などの措置が行われた(『日本三代実録』貞観2年10月15日条・4年6月

14 日条・同年 12 月 25 日条)。貞観 5.6 年の平野社の 4 神(今木神・久度神・古関神・比売神)に対する叙位は高野新笠に關係し、早良親王(および桓武天皇)につながるかもしれない。また、多武峰墓や鹿嶋神や阿多墓(藤原良継)など藤原氏にまつわることがらもある⁵。これは藤原仲成とつながるかもしれない。

早良親王陵は八嶋陵(淡路国から改葬)で、ここにすでに八嶋寺があった。大同 5(810)年、嵯峨天皇が病気になった時、早良親王が幽閉された乙訓寺(長岡寺)、伊予親王・藤原吉子が最期を迎えた川原寺で誦経や写経が行われた。伊予親王の墓は山城国宇治郡の巨幡墓であった。彼らがさらに靈感寺と結びつくことはない。橘逸勢や文室宮田麻呂は靈感寺の創建より後の時期の御霊であり、該当しない。神泉苑の御霊会で祭られたものに限ると、靈感寺・檜本神社・2 つの墓は藤原薬子の変と関わる可能性がもっとも強いと考える(具体的に人物を特定することは難しい)。御霊をめぐる問題は本テーマから大きく逸脱するので、別に考えてみたい⁶。

さて、檜本神社がかつて野馬田明神と称されたことにもどる。御霊が馬や牧とどのような連関を持つのかは不明であるが、墓と馬や牧は關係がありそうである。その理由はよくわからない。大和の西部は牧が散在する地域であるが、墓も散在する。

孝霊天皇の山陵は『古事記』に「片岡馬坂上にあり」、『日本書紀』に「片丘馬坂陵」とあり、『延喜式』諸陵寮に「片丘馬坂陵 黒田廬戸宮御宇孝霊天皇 大和国葛下郡にあり 兆域東西五町・南北五町 守戸五烟」とみえる。

以下は地誌類の記載である。

『大和名所図会』

孝霊天皇陵 王寺村にあり (陵考)に曰く 山形の高さ八間 地廻二十五間 字は峰の垣戸といふ

『大和志』

片岡馬坂陵 孝霊天皇 王寺村馬脊坂東山中にあり 陵畔に塚二あり

『大日本地名辞書』

孝霊天皇の御陵なり 今王寺村馬背坂の東に在り 墳起高八間周二十五間 字峰垣内と曰ふ(書紀通証山陵考)日本書紀に云わく 大日本根子彦太瓊天皇を片丘馬坂陵に葬る 延喜式に云わく 片丘馬坂陵 黒田廬戸宮御宇孝霊天皇 大和国葛下郡にあり 兆域東西五町・南北五町 守戸五煙。

『大和志料』

片岡馬坂陵 孝霊天皇の山陵なり 王寺町大字王寺にあり 馬瀬坂と字す

孝霊天皇が実在したとは考えにくい、山陵と認識されたものが馬坂(地誌類は馬背(脊・瀬)坂)に存在したことは事実である。この地は前述した律令制下で平群郡那珂郷に近く、同郷に牧野の地名があったことが確認できる。

さらに、その南方に和乙継(高野新笠の父)の牧野墓が存在した。『延喜式』諸陵寮に「牧野墓 太皇太后之先和氏 大和国広瀬郡にあり 兆域東西三町・南北五町 守戸一烟」とある。同じく地誌類の記載は次の通り

『大和名所図会』

牧野墓 広瀬村の西三十町ばかりにあり 太皇太后の先和氏墓(延喜式)

『大和志』

牧野墓 大皇太后之先和氏 桓武帝外祖父 ○大垣内村北西十町にあり 今 莫邪塚と称す

『大日本地名辞書』

牧野墓は桓武帝の外祖父高野乙継の墓也 高野朝臣初め和氏と曰ふ 太后新笠姓を賜ふて高野と曰ふ 延喜式云 牧野墓 太皇太后之先和氏。大和国広瀬郡にあり 兆域東西二町南北二町 名所図会云 牧野墓は成相墓の西十町許に在り

『大和志料』

牧野墓 平城天皇の大皇太后和氏を葬る 馬見村大字大垣内に在り 逆野(バクヤ)塚と字す 「バクヤ」は牧野の訛なりと

地誌類は牧野墓を牧野古墳(奈良県広陵町馬見北)に比定するようであるが、現在、牧野古墳は押坂彦人大兄皇子の墓とする説が有力である。牧野墓の名称自体が牧と墓の連関をものがたる。

以上の馬・牧と墓の事例から、檜本神社が野馬田明神と称されたことの背景に実際、牧が存在し馬が飼育されていたことを想定することは可能である。平群の牧の所在地の候補としてこの地をあげておく。

この地は西に竜田川が流れ、その西はすぐに丘陵地帯となり、平地が広がるのは川の東方のみである。東方に丘陵の先端部がはりだし、その南面に長屋王・吉備内親王墓(伝承)があり、いっぽう、北面を沿うように、外川が紀氏神社あたりから南西へ流れ、竜田川に流入する。竜田川と外川の間はちょうど東西および南が川で区切られたひとつの区画となる(図 10 参照)。旧梨本村は外川の周辺に広がり(竜田川の西にもあり)、靈感寺の所在地もそのあたりである。

平群の地は律令体制下の大和国平群郡平群郷に相当する。地名「平群」は扱いにくいものである。郡名でもあり郷名でもあり、かつ、群の字は郡の字と誤りやすい。混乱を防ぐために「大和国平群郡内平群郷」のような表記が行われ(天喜 6(1058)年 10 月 9 日慶寿田地施入状案 『平安遺文』896 号)、やがて「内平群郷」の表記が登場した(嘉承 2(1107)年正月 10 日東大寺三綱等解案 『平安遺文』1107 号)。常に「内」を付けることにより平群郡との区別をはかったものと思われる。

特殊な小条里が平群郷に存在した(内平群条里とも通称される)。東西の条を東条・中条・西条と称し、南北の里を南から数えて数字で表記するものである。おおむね現地比定も確実で、それによると、当該地は中条 4 里に相当する。平安時代の、平群郷の条里に関わる史料をまとめたのが表 2 である。表 2 掲載のものに加えて大きな史料として延久 2(1069)年の興福寺大和国雑役免坪付帳があるが、それを別に集計したのが表 3 である。それらから、当該地におけるある程度の田畠の存在を確認することができ、多くはない事例であるが、中条 4 里あたりに大きな牧などを想定することはむずかしい。また、荘園名として土田荘・窪田西荘を拾い上げることができる。平安時代、特にその末期に田畠の広がる地域になっていたことはまちがいない。

牧の推定地としてもうひとつ御櫛神社周辺をあげることができる。御櫛神社を馬御織連と結びつけるのは名の近さからの推定であろうが、ほかの資料などによって論を深めていく可能性はあまり大きくはないようである。

3. 竜田道の概略

竜田道は河内と大和の竜田を結ぶ山越えの道である。大和川の北岸に沿い、竜田大社（現奈良県三郷町）あたりから竜田山を越え、亀瀬峡谷を経て河内の、大和川と石川の合流地点に至った。山越えの詳細なルートは複数考えられる。竜田から法隆寺の南を進み、斑鳩町高安付近で、いわゆる太子道（筋違道）と交わり、さらに東へ進み、「北の横大路」と呼ばれる、奈良盆地の東西の幹線道路になる。この道はこの付近から直線的に橿本（現天理市橿本）までのび、さらに、都祁を経て伊賀・伊勢に至った。平群の馬は竜田道の交通と強い結びつきを有したと思われる。ここで古代における竜田道に関する史料を概観しておく。

竜田道はまず、『日本書紀』の神武東征伝承にみえる。神日本磐余彦尊（後の神武天皇）は難波から河内を経て大和に入ろうとした。『日本書紀』に、「皇師兵を勸えて歩より竜田に趣く。而して其の路狭く嶮しくして 人並み行くことを得ず」とある。竜田を越えて入ろうとしたが、道が狭く険しく並び行くことができなかつたのである。その結果、神日本磐余彦尊は生駒山を越えた。『古事記』にこのような記述はない。なぜ『日本書紀』のみにこの記述があるのかは不審であるが、西から大和に入るのに竜田道をとるのが普通で、生駒山越えはあまり用いられないルートであったのかもしれない。

次に注目すべきは『古事記』『日本書紀』ともにみえる仁徳天皇死後の住吉仲皇子の反乱記事である。表 4 に概略を示した。

大坂とは穴虫越のこと。この道は二上山の北側を通る峠越えの道である。飛鳥山はいわゆる河内飛鳥周辺の山である。当岐麻路（当摩路）は現当麻町から竹内峠をこえる、いわゆる竹内街道のことである。この道は二上山の南側を通過。この説話から大和の中南部に三本の大きな道があったことが判明する。竜田山越え・大坂越え（穴虫峠）・当摩道（竹内峠越え）である。

厩戸皇子の竹原井遊行の物語も竜田道周辺を舞台とする。『万葉集』に「上宮聖徳皇子、竹原井に出で遊びます時に竜田山の死人を見て悲傷しびて作らず歌一首」がある（巻 3・415）。竹原井は竜田道沿いにあり、養老 1(717)年 2 月の元正天皇の和泉・難波行幸や天平 6(734)年 3 月の聖武天皇の難波宮行幸、天平 16 年 10 月の元正太上天皇の行幸、宝亀 2(771)年 2 月の光仁天皇の交野・難波行幸にあたり、利用された竹原井頓宮があった地点である（『続日本紀』）。この説話とよく似た厩戸皇子の説話が『日本書紀』（推古 21=613 年 12 月 1 日条）や『日本霊異記』の片岡遊行説話である（上 4「聖徳皇太子、異しき表を示すの縁」）。

『日本書紀』によると、推古 21 年 11 月に難波から京に至る大道を置いた。京とは推古天皇

の王宮小治田宮である。この道について、いわゆる難波大道—竹内街道—横大路のルート
を想定するのが通説である⁷。難波大道は難波宮の中軸線上を南北にのびる道のことであり
が、設置が推古天皇の時代までさかのぼるかどうかは不明である。横大路とは奈良盆地を東
西に走る直線的な道で、竹内街道から東へ、桜井市の市街に至る全長 13km ほどの道であ
る。

これに対して、難波を南下する道—旧大和川沿いに斜行する道(河内)—竜田道—太子道
のルート进行するもうひとつの有力な考え方がある⁸。旧大和川沿いの道は奈良時代に「渋
河道」と呼ばれたと思われる道である。大阪の四天王寺あたりから直線的に東南方向に斜行
し、渋川廃寺あたりでやや角度を変えて、大和川・石川の合流地点あたりに至る、旧大和川
の自然堤防上を進む道である。そこから竜田道をへて太子道につながり飛鳥に到達するル
ートである。

推古 16 年に隋の使節斐世清が倭国を訪れ難波津から大和川の水運を利用して小治田宮
へ向かった。さらに 18 年の新羅・任那の使節も同じようにして大和に入ったらしい。外国使節
は大和川の水運を利用して難波・大和間を移動したのである。大和川沿いの道から竜田道・
太子道のルートはこのような外国使節の入京ルートと平行する。

壬申の乱は大規模な内乱であったが、河内・大和国境は戦闘の場となった(『日本書紀』天
武 1=672 年 7 月 23 日条)

初め將軍吹負 乃樂に向いて稗田に至りし日に 人有りて曰わく 河内より軍多に至ると
いう。則ち坂本臣財・長尾直真墨・倉墻直麻呂・民直小鮪・谷直根麻呂を遣して三百の
軍士を率て竜田に距かしむ。復佐味君少麻呂を遣して数百人を率て大坂に屯ましむ。
鴨君蝦夷を遣して数百人を率て石手道を守らしむ。是の日に 坂本臣財ら平石野に次
れり。時に近江の軍高安城に在りと聞きて登つ。乃ち近江の軍 財ら来るを知りて悉に税
倉を焚きて皆散け亡せぬ。仍りて城の中に宿りぬ。会明に西の方を臨み見れば 大津・
丹比 両の道より軍衆多に至る。顯に旗幟見ゆ。人有りて曰わく 近江の将壹伎史韓国
が師なりという。財ら高安城より降りて衛我河を渡りて 韓国と河の西に戦う。財ら衆少くし
て距ぐこと能わず。是より先 紀臣大音を遣して懼坂道を守らしむ。是に 財ら懼坂に退
きて 大音が營に居り。是の時に 河内国司守来目臣塩籠 不破宮に帰る情有りて 軍
衆を集う。爰に韓国到りて 密に其の謀を聞きて将に塩籠を殺さんとす。塩籠事の漏れし
ことを知りて乃ち自ら死す。一日を経て 近江の軍 諸の道に当たりて多く至る。即ち並
びに相戦うこと能わずして 解き退く。是の日に 將軍吹負 近江のために敗られて特一
二騎を率て走ぐ。墨坂に逮りて遇菟が軍の至るに逢いぬ。更も還りて金綱井に屯みて
散れる卒を招き聚む。是に 近江の軍大坂道より至ると聞きて 將軍軍を引きて西に如
く。当麻の衢に到りて 壹伎史韓国が軍と葦池の側に戦う。時に勇士来目という者有りて
刀を抜きて急に馳せて 直に軍の中に入る。騎士繼踵りて進む。則ち近江の軍悉に走
ぐ。追いて斬ること甚多なり。爰に將軍 軍中に令して曰わく 其れ兵を發す元の意は
百姓を殺さんには非ず。是元凶の為なり。故妄に殺すことなかれという。是に韓国 軍を
離れて独り逃ぐ。將軍遥に見て来目をして射しむ。然れども中らずして 遂に走りて免る
ことを得たり。將軍更本營に還る。

大海人皇子側に属した大伴吹負に対して大友皇子側の軍が河内から来襲した。吹負はその情報を得て、坂本財・長尾真墨・倉壙麻呂・民小鮪・谷根麻呂に命じて竜田で防がせ、佐味少麻呂に大坂を、鴨蝦夷に石手道を守らせた。坂本財らは大友皇子側の軍がいた高安城に至り、相手の軍はみな逃亡していった。翌朝、西方をみると、大友皇子側の壹伎韓国の軍が大津道・丹比道から至るのがみえ、財らは河内へ降り、衛我河を渡り戦ったが敗走し、懼坂道へもどった。その後、吹負は墨坂で援軍と合流し、金綱井で軍勢を立て直し、当麻衢にいたり葦池の側で壹伎韓国の軍と戦った。今回は、吹負が勝利し、韓国の軍は悉く逃亡していった。

大坂は穴虫峠周辺で、石手道はその南の竹内街道のことと考えられる。懼坂道は竜田道沿いの峠付近と推定される。『万葉集』に「恐の坂」を詠んだ歌がある(巻 6・1020～1022 番石上乙麻呂の配流の時の歌)

ここでも竜田道・大坂道(穴虫峠越え)・石手道(竹内峠越え 当麻道に同じ)の三本の幹線道路の存在が確認できる。当初、敗北した大伴吹負は東方の墨坂で援軍と合流し、体勢を立て直し、西へ進んだ。吹負が墨坂から当麻まで進んだ道は横大路であった。

その後、天武 8 年 11 月に竜田山・大坂山に関を置いた(『日本書紀』)。さらに藤原宮内の出土木簡に「弥努王等解 平群・大坂 二処」(奈良県教育委員会『藤原宮：国道 165 号線バイパスに伴う宮域調査』1969 年)と記されたものがある。これは弥努王等らが提出した解で、差出はきちんとした官司名になっていないが、大宝律令施行以後の、8 世紀のものともみられる。この木簡は、確かな内容は不明であるが、平群・大坂の関の存在をものがたる貴重な資料である。

4. 万葉集の竜田

竜田は『万葉集』中にも多く詠われている。主なものを掲出する。

巻 1・83 番 和銅五年壬子の夏四月 長田王を伊勢の齋宮に遣わす時 山辺の御井にして作る歌(第 2 首)

海の底沖つ白浪立山何時か越えなむ妹があたり見む

右二首 今案うるに 御井の所の作に似ず けだしその時誦する古歌か

長田王が齋宮への旅途中で宴会を行い、古歌を披露したらしい。『伊勢物語』(筒井筒)・『古今和歌集』にこれを元にしたとされる歌「風吹けば沖つ白波たつた山夜半にや君がひとり越ゆるむ」がある。和銅 5 年は 712 年。

巻 5・877 番 書殿にして餞酒せし日の倭歌四首(第 2 首)

人もねのうらぶれ居るに竜田山御馬近づかば忘らしなむか

天平 2(730)年、山上憶良が大伴旅人を招いてはなむけの宴を行った時の山上憶良の歌。

巻 6・971 番 四年壬申 藤原宇合卿の西海道節度使に遣さるる時に高橋連虫麻呂の作る

歌一首[短歌を併せたり]

白雲の 竜田の山の 露霜に 色づく時に うち越えて 旅行く君は 五百重山 い行き
さくみ 敵守る 筑紫に至り 山の極 野の極見よと 伴の部を 班ち遣し 山彦の 応へ
む極み 谷墓の さ渡る極み 国形を 見し給ひて 冬ごもり 春さり行かば 飛ぶ鳥の
早く来まさね 竜田道の 丘辺の道に 丹つつじの 薫はむ時の 桜花 咲きなむ時に
山たづの 迎へ参出む 君が来まさば
千万の軍なりとも言挙げせず取りて来ぬべき男とぞ思ふ

右は補任の文を檢うるに 八月十七日に東山山陰西海の節度使を任ず

『続日本紀』によると、天平 4(732)年 8 月 17 日に藤原宇合は西海道節度使に任命された。『公卿補任』でも同年月の任命記載がある。宇合の将来を予祝する歌であり、送別の席で歌われたものとしてふさわしいとされる。

卷 9・1747～1750 番 春三月 諸卿大夫らの難波に下りし時の歌二首[短歌を併せたり]

白雲の 竜田の山の 滝の上の 小桜の嶺に 咲きををる 桜の花は 山高み 風し止ま
ねば 春雨の 継ぎてし降れば 秀つ枝は 散り過ぎにけり 下枝に 残れる花は 須臾
は 散りな乱れそ 草枕 旅行く君が 帰り来るまで
我が行きは七日は過ぎじ竜田彦ゆめ此の花を風にな散らし
白雲の 竜田の山を 夕暮れに うち越え行けば 滝の上の 桜の花は 咲きたるは 散
り過ぎにけり 含めるは 咲き継ぎぬべし 彼方此方の 花の盛りに あらねども 君が御
行きは 今にしあるべし
暇あらばなづさひ渡り向つ峰の桜の花も折らましものを

卷 9・1751.1752 番 難波に経宿りて明日還り来し時の歌一首[短歌を併せたり]

島山を い行き廻れる 川副ひの 丘辺の道ゆ 昨日こそ 我が越え来しか 一夜のみ
寝たりしからに 峰の上の 桜の花は 滝の瀬ゆ 落ちて流る 君が見む その日までに
は 山下の 風な吹きそと うち越えて 名に負へる杜に 風祭せな
い行会の坂の麓に咲きををる桜の花を見せむ児もがも
(1753～1760 番 略)

右の件の歌は高橋連虫麻呂歌集の中に出ず

高橋虫麻呂が知造難波宮事の藤原宇合に従った時に作ったと思われる歌。1747-50 は難波への往路、1751.1752 は復路の歌。『続日本紀』によると、宇合は神亀 3(726)年 10 月 26 日に知造難波宮事に任命され、天平 4 年 3 月 26 日に知造難波宮事藤原宇合以下、仕丁以上への賜物が実施された。そして、天平 6 年 3 月に聖武天皇の難波行幸があり、陪従の百官や造難波宮司などに賜禄が行われた。これらの歌が詠まれた時期について、知造難波宮事任命の次の 3 月である神亀 4 年 3 月、宇合が賞された天平 4 年 3 月、聖武が行幸した天平 6 年 3 月の 3 つの見解がある⁹。なお、971 番の歌のように、高橋虫麻呂は藤原宇合を「君」と呼ぶような関係にあったが、その実態はよくわからない。虫麻呂は宇合の資人であったとする見解もある(竹本晃)。

小桜の嶺は竜田道からみえる峰である。これを小倉寺村(現生駒市小倉寺町付近)の峰と

解釈し、暗峠にあてる見解が古くからある。ただし、小倉寺村は暗峠の北方で、竜田山とは離れる。地誌類の記述は次のようである。

『大和名所図会』

掠嶺越 平群郡西畑村 此所茶屋多し 大坂街道なり 東の端にて両側一家づつは大和国西畑村の内 其余は河内国なり 此所より北は生駒山 南は小倉山 これを略して掠嶺といふ 世にくらがり峠とよぶ いにしへは生駒山の松杉の大木茂り 此道暗かりければ名くるともいふ 此説は非なり 豊臣秀長公郡山の城を築き給ふ時 ことごとく木を伐り取り給ひしなり 今も官には倉銀峠と書く 掠嶺本字なるべし

『大和志』

小倉峰 二有り 一は立野村の西に有り 一は小倉寺村の上方に有り

『大日本地名辞書』

小鞍嶺 滝上の小鞍嶺は此歌ともによるに彼亀瀬の辺の一の山にはありける 大和志に「小倉峰 二有り 一は立野村の西に有り」また立田之島山とよめるは彼川の折廻て島となれる処を指して島山とはいへるなり 然るを契沖が古今集余材抄 加茂翁が伊勢物語古意などに此立田山なる小倉峰を暗峠の事なりと註はれつるは誤なり 暗峠 南生駒村に属し河内枚岡に越ゆ 近代奈良大坂の通路は専ら之に由りしを其名著る 或は暗嶺越と曰ふ

『大和志料』

小倉峰 両処あり 一は立野の西にして土人「ヲクンロ」と称す 古歌に所謂「竜田の山の滝の上の小倉の山」は即ち是 一は小倉寺の上方にあり

掠嶺 南生駒村大字西畑に属す 大和より難波に達する古道なり 北に生駒山 南に小倉峰あり 小倉峰を略して倉嶺と称し 更に倉銀・掠嶺の文字を仮用す 俗に之を「クラガリ」(暗峠)と呼ぶは転訛なりと云ふ 大和名所図会に拠る

生駒山の南から竜田山あたりの山並みを全体として「くら」(「おぐら」)峰と称した可能性がある。これは鞍を付けた馬で峠を越えることも含めて、馬との結びつきを示唆する地名ともいえる。

卷 10 詠黄葉 2194 番

雁がねの来鳴きしなへに韓衣竜田の山はもみち始めたり

同 2211 番

妹が紐解くと結びて立田山今こそ黄葉はじめてありけれ

同 2214

夕されば雁の越え行く竜田山時雨に競ひ色づきにけり

「詠黄葉」としてまとめられた 41 首の歌のうちの 3 首。このほかに大坂および二上山を詠んだ歌(2185 番)、生駒山を詠んだ歌(2201 番)がある。このあたりの山並みから黄葉のイメージが想起されることが多かったようである。

卷 15 3722 番 筑紫に廻り来りて海路より京に入らんとし 播磨国家島に到りし時に作歌五

首(第5首)

大伴の御津の泊に船泊てて竜田の山を何時か越え行かむ

天平8年の遣新羅使に関わる145首の歌のうち、新羅からの帰路、筑紫の海路から家島群島に到り着いて詠んだ歌の1首。大伴の御津は難波津のこと。この時の遣新羅使は翌年の伝染病の大流行のきっかけとなったことでよく知られるが、『続日本紀』に次のような記事を拾うことができる。この後、伝染病の流行が始まった(表5)。

卷17 3931番 平群氏の女郎の越中守大伴宿祢家持に贈る歌十二首(第1首)

君によりわが名はすでに立田山絶えたる恋のしげき頃かも

右の件の歌は時々に使使に寄せて来贈れり。一度に送れるにはあらず

平群氏女郎は不明。名(浮名)が立つと竜田山をかける。

卷20 4395番 独り竜田山の桜花を惜しむ歌一首

竜田山見つつ越え来し桜花散りか過ぎなむわが帰るとに

(4396.43797番 略)

右の三首は二月十七日に兵部少輔大伴家持作れり

天平勝宝7(755)年2月17日の歌。4321~4424番の歌は天平勝宝7年2月に難波から筑紫に派遣された東国の防人やそれに関わりをもつ歌。家持は兵部少輔の任にあつて防人の派遣に従事し、難波に行くために竜田山を越えたことがあつたと思われる。

おわりに

以上、有力豪族平群氏と馬の関係、牧の推定地としての檜本神社(かつて野馬田明神と呼ばれた)周辺の歴史的環境、大和国の北西部の馬や牧と強く結びつくことと推定される竜田道について論点の整理や関係資料の提示を行ってきた。特にしっかりとした結論はないので、全体の要約は省略する。竜田道に関して、3節で律令体制以前の時代を扱い、4節での『万葉集』の考察がおおむね奈良時代に該当する。平群駅の存在など、この時代のほかの論点も豊富であるが、省略した。

¹基本的な先行研究として、笹山晴生「たたみこも平群の山」(同『奈良の都 その光と影』(吉川弘文館 1992年) 初出 1972年)、辰巳和弘『地域王権の古代学』(白水社 1994年)、笹川尚紀「平群氏の研究」(『人文知の新たな総合に向けて』第3回報告書 2005年)

²鷲森「奈良時代の牧と馬の貢上」(『奈良学研究』15 2013年)、「倭馬飼とその牧」(『帝塚山大学文学部紀要』39 2018年)

³田中卓「『紀氏家牒』について」(同著作集 2『日本国家の成立と諸氏族』(国書刊行会 1986年) 初出 1957年)参照。

⁴直木孝次郎「平群鮪をめぐる歌物語の成立について」(同『夜の船出』(塙書房 1985年) 初出 1977年)参照。

⁵『日本三代実録』貞観5年2月7日条(多武峰墓での伐樹放牧を禁じる)、貞観7年5月

26 日条(大和国多武峰墓辺寺に居住する近士賢基に供料を与え、沙弥を率いて墓の四至内を検させる)、貞観 8 年 1 月 20 日条(陸奥国の鹿嶋大神の苗裔神に奉幣し、鹿嶋大神宮の六か院修造のために植樹)、同年 10 月 23 日条(藤原良継墓に守籬丁を置く)。

⁶鷺森「大和国靈感寺と御霊信仰」(『日本文化史研究』52 2021 年)

⁷岸俊男「古道の歴史」(同『日本古代宮都の研究』(岩波書店 1988 年) 初出 1970 年)

⁸安村俊史「推古二一年設置の大道」(『古代学研究』196 2012 年)

⁹竹本晃「高橋虫麻呂の桜花の歌の創作」(『大阪大谷大学歴史文化研究』20 2020 年)

表 1 平群氏とその同族

氏姓	『新撰姓氏録』種別	『新撰姓氏録』記載内容	『古事記』武内宿祢系譜
平群朝臣	右京皇別	石川朝臣と同氏 武内宿祢の男平群都久宿祢の後裔	平群臣
平群文室朝臣	右京皇別	武内宿祢の男平群都久宿祢の後裔	
都保朝臣	右京皇別	平群朝臣と同祖 都久足尼の後裔	
馬工連	大和国皇別	平群朝臣と同祖 平群木兔宿祢の後裔	馬御檄連
早良臣	河内国皇別	平群朝臣と同祖 武内宿祢の男平群都久宿祢の後裔	平群臣
額田首	河内国皇別	早良朝臣と同祖 平群木兔宿祢の後裔 父の氏をつがず母の氏額田首を名乗った	
韓海部首	摂津国未定雑姓	武内宿祢の男平群木菟宿祢の後裔	

表 2 平安時代の文書にみえる平群郷の条里

日付	西暦	文書名	対象の土地	内容	平安遣文番号
貞観 12 年 4 月 23 日	870	某郷長解写	平群東条 1 平群里 13・14 坪	家地の売買	163
天喜 6 年 10 月 9 日	1058	慶寿田地施入状案	平群郷東条 3 里 15・16・21・29・33・34・35 坪	田畠の施入	896
嘉承 2 年 1 月 10 日	1107	東大寺三綱等解案	平群郷東条 1 里 22 坪 2 里 4・21・22・25・28・30・36 坪 3 里 2・4・15・16・19・20・21・22・36 坪 3 里(記載脱)27・28・29・30・31・32・33・34・35 坪 4 里 6 坪 中条 3 里 25・26・36 坪 4 里 3・11 坪(土田荘)	免田の相論	1669
保延 3 年 3 月	1137	大和国東大寺花厳会床饗免田注文案	平群郷東条 1 里 22 坪 2 里 4・31(誤か)・20・26・28・25(35 か)・36 坪 3 里 2・3・15・16・19・20・21・21(誤か)・26・27・28・29・30・31・32・33・34・35 坪 4 里 6 坪 中条 3 里 25・26・36 4 里 3 坪	免田の注進	2365

表3 興福寺大和国雑役免坪付帳にみえる平群郷の条里

荘園名	官物	東条	中条	西条	不明
窪田西庄	常楽会免田	東条 4 里 5 坪	中条 3 里 33 4 里 10 坪		
	平隆寺		中条 4 里 17 坪		
	公田畠	東条 3 里 32 坪 4 里 4・8・17・19・26・ 27 坪	中条 4 里 11・12・ 13・14・15・23・24・ 25 坪 5 里 9 坪		
西宮庄	灯油免田	東条 1 里 5・6・7・ 17・30 坪 2 里 7・ 8・16 坪	中条 1 里 24 坪 2 里 2・12 坪		
	無主位田	東条 1 里 20・29・ 17(誤か)坪	中条 3 里 29 坪		
	法興院田	東条 2 里 9 坪			
	平隆寺田		中条 1 里 13 坪		
	公田畠	東条 1 里 8・9・16・ 18・19 坪 2 里 19・ 20・21 坪	中条 1 里 1・10・ 13・25・34・35 坪 2 里 13・15・16 坪 3 里 13・14・18・ 19・20・21・22・23・ 24・27・28 坪	西条 3 里 13・24・ 25・26 坪	
興富庄	常楽会免田				1 里 15・27 坪 2 里 3・10 坪 3 里 9・10 坪
	長講免田				1 里 32・34 坪
	公田畠	東条 1 里 14・22・ 23・28・31・33・35 坪 2 里 2・4・5・6・ 11・12・13・坪 3 里 5・6・7・8・11・ 12・16・17・18・24 坪 4 里 30 坪	中条 1 里 36 坪 2 里 1 坪		

表 4 住吉仲皇子の反乱

『古事記』	『日本書紀』
<p>伊邪本和氣王(履中)は難波宮で大嘗祭をおこない、酒に酔い寝てしまった 墨江中王は天皇の大殿に火をつけた</p>	<p>太子(去來穗別皇子)は羽田矢代の女黒媛を妃とするために住吉仲皇子を遣わしたが、住吉仲皇子は黒媛をおかした。太子がそれを知り、住吉仲皇子は太子を兵をおこし太子の宮を囲んだ</p>
<p>倭漢直の祖阿知直が履中を馬に乗せて逃亡させた</p>	<p>平群木菟・物部大前・漢氏の祖阿知使主が太子をたすけて逃亡させた。</p>
<p>伊邪本和氣王は多遲比野で目をさまし、歌を詠んだ 「多遲比野に 寝むと知りせば 立つ薦も 持ちて来ましもの 寝むと知りせば」</p>	
<p>波迹賦坂に到り難波宮が燃えているのをみて歌を詠んだ「波迹布坂 吾が立ち見れば かぎろひの 燃ゆる家群 妻が家のあたり」</p>	<p>太子は河内国埴生坂で目を覚まし、難波のあたりを見て大いに驚ろいた</p>
<p>大坂の山口で女人に会い、その女人は多くの兵が山を塞ぎっているの、当岐麻道から越えるのがよいと申した。天皇は歌を詠んだ「大坂に 遇ふや嬢子を道問へば 直には告らず 当芸麻路を告る。</p>	<p>飛鳥山口で少女に出会い、少女は兵が山中に満ちているの、当摩道から越えるのがよいと申した 太子は歌を詠んだ。「大坂に 遇ふや少女を 道問へば 直には告らず 当摩路を告る」</p>
	<p>竜田山を越えたが、数十人の兵と出会った 阿曇浜子(あるいは黒友)が率いる淡路野嶋の海人で太子を追っていた 伏兵を出してそれを捕えることができた。倭吾子箆が太子をとどめようとしたが、帰順した 太子はそれを疑い、倭吾子箆を殺そうとしたが、吾子箆は妹日之媛を献じ罪を免れた。</p>
<p>石上宮に到着した</p>	<p>石上振神宮に至った。</p>
<p>同母弟水齒別命が着き、伊邪本和氣王は墨江中王の殺害を命じた。水齒別命は墨江中王に近侍する隼人曾婆加里を欺いて墨江中王を刺し殺させた しかし、水齒別命は大坂の山口で曾婆訶里を斬り殺した。</p>	<p>同母弟瑞齒別皇子が着き、太子は住吉仲皇子の殺害を命じ、平群木菟を添えて遣わした 瑞齒別皇子は住吉仲皇子の近習の隼人(刺領巾)に住吉仲皇子を刺し殺させた 平群木菟は刺領巾を殺害した</p>

表 5 天平 8 年の遣新羅使 (『続日本紀』による)

日付	できごと
天平 8 年 2 月 28 日	阿倍継麻呂を遣新羅大使とする
天平 8 年 4 月 17 日	阿倍継麻呂ら拝朝する
天平 9 年正月 27 日	遣新羅使大判官壬生使主宇太麻呂・少判官大蔵麻呂入京する 大使阿倍継麻呂は対馬で卒し副使大伴三中は病気のため入京できず
天平 9 年 2 月 15 日	遣新羅使が新羅が常礼にそむき使の旨を受けなかったことを奏上する 官人たちを内裏に召し意見を述べさせる
天平 9 年 2 月 22 日	諸司の意見の奏上を終える (遣使して理由を問う、発兵して征伐するなど)
天平 9 年 3 月 28 日	副使大伴三中ら拝朝する
天平 9 年 4 月 1 日	伊勢神宮・大神社・筑紫住吉・八幡 2 社・香椎宮に奉幣して新羅の無礼のさまを告げる



図 1 檜本神社西方の竜田川 (南から)



図 2 檜本神社 正面鳥居



図 3 檜本神社



図 4 檜本神社遠景(南から)



図 5 竜田川・外川の合流地点
(手前が竜田川 正面は平群小学校)

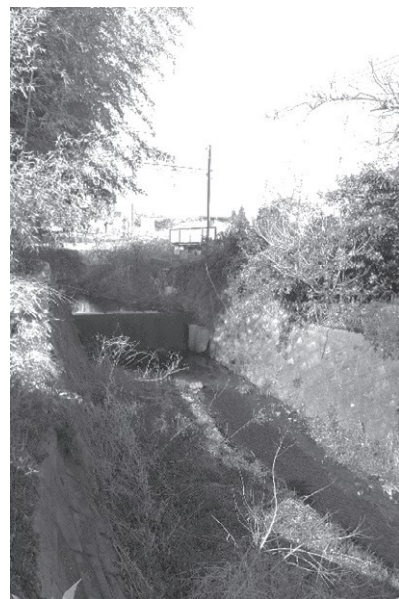


図 6 外川(正面は近鉄線の橋)→



図7 外川(紀氏神社前 東から)



図8 吉備内親王墓



図9 長屋王墓



図 10 関係地図

地理院地図 Vector (<https://maps.gsi.go.jp/vector/>) の地図に加筆
矢印は図 1-9 の撮影場所と方向